

踏み跡 < My mountains >

奥那須	塩原温泉から日留賀岳往復	No.083
-----	--------------	--------

昭和42年4月7日

日留賀岳へ昨年の4月3日以来一年ぶり、二度目の試み。

昨年は日帰りだったが、今年は状況次第では稜線をもう一步北上してもよからうと思ひ、二日間の計画を組んだ。今回は日留賀岳登山と言うことのほかに、雪中ビバークという初体験に挑むということもあり、うまく行けばかなりの成果が期待できる山行である。

22時40分の鈍行で行く予定を組んでいたが、大森まで仕事で出てしまい残念ながら間に合わず。仕事を済ませて上野駅に着くと23時25分。

23時50分の急行しのぶ・ひばらに乗ることにして、駅で駅弁・パン・ビスケットなど食料を購入して乗車。

出鼻でまず予算狂いとなってしまった。(上野～西那須野770円)

金曜日で列車は空いている。車内で夜食をとり、すぐに座席に横になった。

昭和42年4月8日

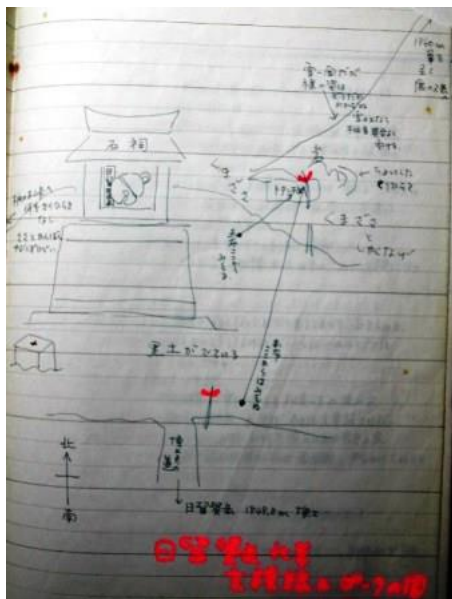
西那須野着3時、一年ぶりの駅のベンチ(略して駅ベン)でツェルトを被って仮眠。

5時起床、4月になったのに予想外の冷え込みだった。朝食は駅ベンで食べる駅弁。野州の広大な原野から日が昇ってしばらくしてバスは6時15分に発車。太陽は橙色、天気が良いようで心うれしい朝。

塩原古町着7時05分、慣れた街中を通り抜けて木の葉石の売店で水を汲み、冷たい牛乳で覚醒。

遠くにピラミッド型の日留賀岳が見える。去年は雪で真っ白だったが、今年はまだ模様なので、積雪量は去年の半分ぐらいだろうか。このコンディションなら見通しは明るいかもしれない。

9時、標識を発見、KWVと書いてある。昨年来た時にはこんなものはなかった。しばらくして二本目の標識と出会い、KWVとは関東学園WV部であることがわかった。昭和41年7月29日となっている。登山路が明確な場所で二本の標識とめぐり合ったが、藪がちになるにつれて標識はなくなった。この山で7月の藪こぎだとおそらく頂上を踏めなかったのではないかと。風景を確認しながら関東学園のパーティの動きを想像して



9時30分まで休憩。

比津羅山北コル(1014m)10時45分、やっと雪が少しだけ出てきた。一年前は雪の原だった。安ヶ森山がうっすらと見える場所で軽食(ビスケット)。暑くて裸でいるほうが楽なほど。アカゲラのドラミングを聞きながら裸で食事なんて何と素晴らしいことか。11時15分出発。

雪が融けたため、昨年見つけられなかったコルから程窪の頭へのルートが発見できた。更に30分ほどで「日留賀岳参道」と書いた白い柱を発見。このルートが正規のものであることが確信できた。

クマザサの稜線にわずかに残った雪庇の上を慎重にキックステップで進み、12時45分程窪の頭(1514m)。去年はここで折り返したが、今回はこの時刻ならまだ先に進める。未踏峰日留賀岳はもう目前、登頂成功も目前。

程窪の頭以降もかすかながら踏み跡と言ったら失礼なぐらいの立派な踏み跡が付いていて、足の運びも順調。途中小さな祠の横でトカゲを楽しんだ後、

15時10分日留賀岳山頂に到着。1848.8m 二年目にしてやっと掴んだ男鹿山塊の第一峰。下から要所要所に結び付けてきた赤い布も残りが少なくなってきた。残念ながら曇り空、ガスと霧雨とで視界は10m足らずという状況。時々吹く風にガスが切れた時に見える鹿の又岳方面の山容の大きさは驚くに値する。カラッと晴れていないことは勿論残念だが、間一年置いて二度目にして「やった」という実感をやっと得ること

踏み跡 < My mountains >

ができた。それだけで十分に満足だ。

頂上の北側の雪面に竪穴を掘ってツェルトを張り、今宵の住居とする。1m以上雪を掘ったら、雪の中から石楠花が顔を覗かせた。(右写真)

15時45分からの夕食はラーメンと餡まんじゅう。明日は晴れば未知の山群を見渡すことができるはずだが、この天気ではおそらく良くはないだろう。だがそれでも日留賀岳に登ることができたということだけで十分な成果だと思う。



静かな夜が近づいてくるツェルトの中で今夜は初めての体験、ヤッケ・オーバーズボン・エアマットのみで足をザックに突っ込んでのビバーク。冬山における有事のビバークのための練習のつもりだが、結果的には本番だ。山に練習はないのだ。今夜いかなる苦難に見舞われたとしても、それに耐えることができなかつたら練習どころではなく命の終わりにだってなり得る。ここまで来て考えて見ると「登山というものは、周到で経済的な、無駄のない無理のない最低限の装備と、多少の経験と忍耐との結集で行われる極めて人間的な行動である」とも言えるような気がする。

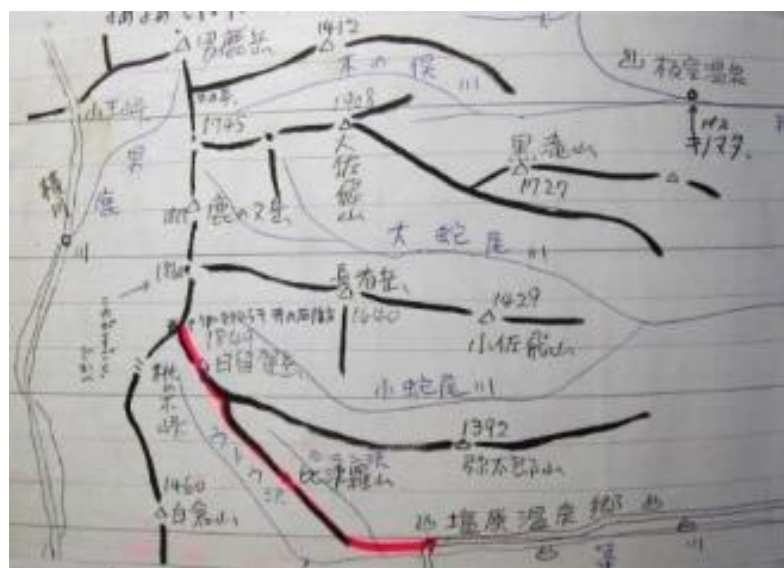
遠い風に揺れる木々の音の間に間に会津西街道を走る最終バスの音を聴きながら、文庫本の詩集を数ページ読んだ後17時に瞑目。22時、足が冷たくて駄目だ。気温としてはさほどの寒さではないが、靴下が少し湿っているのが原因のようだ。ガマンせい・ガマンせいと気合を入れてみたが、精神一到了したところで濡れている靴下はやはり濡れている。コンロに火をつけて念入りに乾かして、再び瞑目。今度は快適。気温は決して低くはない。

昭和42年4月9日

0時を過ぎるとやはり寒くなってきた。気温が何度かということよりも、体がそう感じる時間帯なのかもしれない。寒くて目が覚めた時にはローソクに火をつけて暖をとることにした。狭いツェルトの中では一本のローソクでもすぐに暖くなる。

いつしか深い眠りに入って、やがて息苦しさで目を覚まして驚いた。ツェルトの中が煙だらけ。寝ぼけ眼で煙を送り出しながら足元を見ると、ローソクが靴の中に倒れてくすぶっている。さっき目が覚めてローソクに火をつけたとき、そのまま居眠りをしてしまいローソクが倒れて靴を焦がしてしまったということに気がつくまでには大分時間がかかった。それほどに熟睡してしまったのだ。これは大変な失敗だ。

何時ごろからだろうか、雪が降ってきた。3時30分起床、雪を融かして水を作り、ちよいと早すぎたラーメン



と肉饅頭の朝食。雪は段々ひどくなり、今や吹雪の状態。これでは先へ駒を進めることはできない。先へ行けぬならまだ起きることもなからう。腹も膨れて温まったので、またうつらうつら。

6時40分二度目の起床。(ビバークスタイルで起床したまま眠っているのに起床というのもおかしいか?)

ツェルトの外に出てパッキング。雪は大分水っばい。

今日の行動は、まず吹雪であることから北進・縦走はやめて、主稜線まで出て偵察を行い、桃の木峠へ稜線沿いに下れるようであればそのルートを取り、駄目な

踏み跡 < My mountains >

場合は往路を戻ると言う作戦に決定し、7時40分に出発。

1848.9mの日留賀岳頂上には立派な日留賀岳神社が建っている。桃の木峠へのルートは見え、北の鹿の又岳へのルートはわずかな切り開きがあるようだが心細い。最後の赤布を鹿の又岳への入口となる小さな切り開きに縛りつけ、神社に再度来訪祈願の拝礼ののち、8時に下山開始。

雪は止んできたが風が強い。体で感じるところからすると秒速15~20mはあるようだ。

下りは雪庇の上を往路で付けた赤い布を頼りに歩き、一応の安全圏である程窪の頭に9時に到着。

今度は曇、風は5~10m程度。

10分ほど下るときれいな参道を見つけることができた。参道を比津羅山北コルに下ると9時30分。コルからナダム口沢へ。沢の途中で昼食(9時45分~10時45分)。曇は小雨に変わり、気温も稜線に比べると一段と高く感じる。お湯を沸かしてチョコレートドリンクを作り、ビスケットを食べて10時のおやつと洒落る。ナダム口沢とウトウ沢の合流点で再び20分の休憩。やはり水の流れる音を聞くとホッとする。キジを撃ち、林道桃の木線に入り12時45分無事塩原温泉に帰着。

西那須野発14時25分(700円)、上野駅には17時20分に帰着。家に着いたら18時30分だった。

結果的には一峰を新しく踏んだに過ぎなかったが、内容を振り返ってみるとかなり得るところのある山行だったと言える。男鹿山塊の様子がさらに詳しくわかり、この山域に更なる興味が湧いてきて、いくつかの登山計画が頭の中で出来上がってきた。

惜しまれるのは靴を焦がしたことと、アイゼンを持っていったが雪質の関係で使用できなかったので運び損に終わったということ。まあまあではないか。

以上

(修正・更新:2023年11月)